

新刊紹介

最究竟者

文學博士 得能文 著

大村書店發行

得能博士が永き病氣のために一先づ教職から退かれたことは、吾が學界にとつての、こよなき不幸事であつたが併しこれを機縁として、先きには我が哲學史上永久的價值をもつ『得能博士還曆記念論文集』が諸家によつて捧げられ、今又、大村書店から同博士の論文集『最究竟者』が發刊されたことは、吾等學徒にとつてのせめてもの欣びでなければならぬ。同書は博士の過去十數年間の論文廿三篇よりなり、發表されたる殆んどすべての主要なる論文が網羅されてゐる。吾等は、この一卷にもられたる豊富なる内容によつて、博士があらゆる人間の名利を外に、ひたすらに眞理の追究に終始せられた過去の痛ましい努力と變遷の業蹟を知ることにも、又それを通じて我哲學思想界の近き過去に於ける種々なる思潮の争鬪と推移の跡を窺ふことが出来る。げにこの書は博士の尊き哲學的思索の成果であるとともに、又明治大正の哲學思想史を代表して昭和をかざる貴重なる文獻である。

巻頭の『現代思想界に於ける二大潮流』以下三論と『經驗的より先驗的へ』以下數章とは、現代の哲學思想とその問題を概観せん

とするものにとつて他に求め難き恰好の文獻であらう。ルネサンス以降の自然觀の變遷や、自然科学的世界觀の發展を述べ、自然主義、實證主義、現實主義の特質を論じ、又それに對してロマンチズム、觀念論、唯心論、理想主義の思の特質が敘されたことや、特にヘッケル、オストワルト、ヴェント、アヴェナリウス、マツハ、シュツペ等の思想の稍くはしき解説とその位置づけ、スチルナー、ニイチエの思想の文化史的意義等の叙せられたるものなど、すべて該博なる博士の知識とその卓見に推服せしめられる博士の説く所によれば第一期のルネサンスに於ては教權の壓抑に對して人間が自我を見出したもの、第二期に於ては啓蒙思想の自然の脅迫に對して自我を樹立したるもの、第三期たる現代に至つては十九世紀の自然科学(寧ろ自然科学的方法)の強威に對して自我の充實若くは成就が要求せられるものを見ることが出来、現代文化の意義は此邊より理解すべきものである。しかしこれらを通じて博士は飽くなき努力と深き思索とによつて夙に自然主義心理主義の不徹底を洞破し率先して理想主義と論理主義の眞意の闡明に盡された脈々たる精神を窺ふことが出来る。しかして博士が早くより現代の理想主義の思潮を、主として理論的理性を以て方法と法則とを定める純粹論理學と、實踐理性を以て規範と形式とを立てる純粹價值哲學、及び詭觀的理性を以て範型と本質とを眺める純粹現象學とに分つて考へたことなども注目し得る。(尙こゝには編まれてないが『生活と哲學』(大正十年東洋哲學)『現今の哲學問題』(大正十二年教育研究)は主として理想主義價值哲學に關して説かれた長文の論文である。)

第四節フイヒテの「我」に就てさいふ大正の初めに物せられた論文にては、フイヒテの自我をば、ウキンテルバンドの解するが如き論理的に設定せられたる抽象概念ではなく流動の生活そのものであるとし Witsen の根本たる自己意識は最も純粹に直接なる經驗であり、知的直觀とは主客を未剖に包攝する具體的なる直覺體験であるとし、要するに知識學は生活の論であるとなされた。フイヒテの思想を『經驗的心理的』として特質づけることは固より充全であるとは言ひ難いであらうが、併し大正初年頃我が思想界に著しき影響を興へたヘルグソンの哲學思想と聯關して考へ、ヘルグソンに於て何等か飽き足らざる所をフイヒテを求め、フイヒテに於ける最も具體的生動的なるものを認めたるものとして興味多き一篇であると思はれる。次に第五節には比較的注目されておないレッツシグケとカントとの關係が論ぜられてゐる。レッツシグケはライブニッツに於ける永久眞理と事實眞理を發展の段階と解し、眞理實現の過程としての歴史に於ける個人の意識を認め、倫理的唯心論の基礎を立て、宗教の基礎を道德に求め、啓蒙主義の理知以外に情意の領域あることを認めたる點に於て、カントへの影響が認めらるべきことが論ぜられてゐる。次に『カントの世界觀』は東洋大學に於けるカント記念祭の講演であつて、カントの主觀主義の根本は道德的意志主觀であり、これによつて眞の客觀性、しかも認識對象の無限課題性を基礎づけらるべきことが述べられ、卷末最後の論文『最究竟者』にも博士の最も圓熟したる思想の表現である。

第七節にはプラグマチズム特にツエームズの純粹經驗説を分析的に解説し、批判して、主觀的觀念論的方法による實在論と斷じ第八節には漸實在論の人生觀に就て論じ、その倫理的善と其の考察態度に對するムーア、ペレー、ラツセルの異同を検討し批判されてゐる。第九節はヘルグソンの直觀的方法による生命の哲學が實在の真相を不斷の創造と見て、こゝに自由と個性を求むる特質を十八世紀以來の一般的思潮の中にその基礎を求め、特にフランスの哲學に於けるコムの實證論とカザンの唯心論とに對する關係を求めて現代に於けるその位置を定め、その自然科学に對する態度としては、オイケンの超科學的、獨逸西南學派の自然科学と並立する文化科學的態度と分つて、ヘルグソンのは特に生物學的事實の内面に入つて深化する方法なりとし、又その實際的意義を論じてその神祕的傾向は決して知力を拒斥するものではなく、却つて實在の根柢より深く解して科學に基礎を興へ、むしろ世界を價值的に見るものであり、その直觀的創造的特質は屢々誤り解せらるゝ様に、非連續的な歴史觀となり非社會的なサンザカリズムに導くものではないことが論證せられてゐる。

第十節にてはポアンカレに於ける直觀と論理との關係を論じ數學に於ける逐次法による推論の法則は論理の矛盾原理に還元するこゝも出來ず又經驗に還元するこゝも出來ない一の先驗綜合判斷の典型であつて、この有限を無限に轉ぜしむるものは無數の推論式を單一の公式に包攝せしめ同じ進行を無限に繰返しうる一の精神力の直觀であることを論じ、終りにポアンカレがユウクリ

ツド幾何學を自然によりよく適合的であるといふことは、要するに非ユークリッド幾何學は只可能的なるものに對する可能根據たるに過ぎないがユークリッド幾何學は現實的認識に對する可能根據として認めるものなりとして、彼の先驗論理主義的特質が論ぜられてゐる。第十五節『關係に就て』に於ては經驗論も主理說も、ともに關係をもつて外面的のものと解することを論じ、關係をより根源的に解して關係を以つて實在と解せんとするもの、十六節『世界觀の哲學に就て』に於てはデイルタイ、シユプランガー、ツムメル、トレルチ等一群の感情要求、生活要求の全體的統一を探る世界觀の哲學を紹介してその意義を語り、しかも眞の *die echte, kaisle Lebensnot* に應じ、究竟的なる要求を充たすものは最も根本的なるものより出發する學の哲學でなければならぬことが示されてある。

博士の實踐哲學的思想は特に東洋的色彩の強きものであることを窺ひうるのは十七節『誠論』と、十八節『倫理哲學の可能性に就て』である。この二篇に於ては眞の倫理學は經驗論的たることを得ずして先驗的な倫理哲學でなければならぬとし、しかも先驗的理想主義は快樂主義を排するも幸福そのものを否定するものとは同一でなきことを言ひ、行爲の終始を論じて動機を知るにはその結果よりすべきを言ひ、儒教に於ける誠の概念に對する諸家の見解を討究してその經驗的解釋を斥け、誠は先驗的な認知であり、あらゆる欲求情念を合理化し、生全體の眞の統一を齎らす、構成的なる原理と解し、人性を盡すことは即ち物の用をなすことであ

り、具體生活の意義即ち理想を認めてその智慧、誠を行ふことはやがて實在を認めることであり、實在の根柢は道德であることされる。『誠なければ物なし。』この誠の根源的先驗的意義は又、こゝには編まれてゐないが『倫理の大本』(大正十年東亞の光)に於ても熱情的に説かれてある。

第十九節『ホルツアノーの知識學に就て』は博士が最も力を致されたある論文の一部である。こゝにはホルツアノーの混淆なる知識學の根本思想の極めて簡明なる、しかも極めて親切なる解説と示唆に充ちたる批評とがなされてある。ホルツアノーの『眞理自體』『命題自體』に對するパラギイの批評に對する反駁等は、博士が、如何に適確に且つ深刻に、ホルツアノーを理解してゐたかを窺はしめる。博士はフツサルさまにも、ホルツアノーの論理主義に高き價值を認めつゝ、しかしその時空を非現實的な概念とせず論證や、*Principium indiscernibilium* の繼承に於て現はれたるライプニッツ的な獨斷論的基礎を指摘し、無限を以て有限の總體とせず點などにては經驗論的方法の潛入せることを認め、カントに對する彼の批評は却つて彼に先驗的方法の著しい缺乏を示してゐること等が論ぜられてゐる。又博士はホルツアノーの概念命題と直觀命題との區別はライプニッツに於ける理性眞理と事實眞理に對應すべきことや、その數學の成立に於ける純粹論理的證明とラッセル、コーヘンの立場との近似等を指示してゐる。又ホルツアノーが表象と對象を峻別しつゝ、しかもこの兩者の對應關係の一致を認むる模寫說に陥らざることに詳しく解説を加へ、しかしこの

二者の關係の根據はホルツァンノーに於ては未だ終極的に明かにされてゐないことが論ぜられてゐる。

第二十と二十一節はリッパスに關する研究である。前者はリッパスが『自然哲學』の後に物した小冊子「Philosophie und Wirklichkeitsbegriff」の殆んど全部の逐譯であつて、リッパスの根本的立場を知るに必須な論文である。後者はリッパスの「Inhalt und Gegenstand; Psychologie und Logik」の根本思想の要約が主となつてゐる。この論文はリッパス研究上極めて重要なものであるが、一九〇五年のミンテンヘンの K. B. Akademie der Wissenschaften の報告論輯の中にあるため容易に手に入り難きものである。博士はこれを偶然にも東大の心理學實驗室の書架から探し求められて珍重して研究されたもの、この論文の精密な全譯が出づる迄は、我國に於ての唯一の文献であらう。蓋しリッパスが従前の心理主義的考察からカントを通つて次第にフイヒテに近づき、フツサルとは稍異なる意味にての純粹現象學の思想に達したこゝや、直接經驗の學と間接經驗の學とを分ち、第一次的自我體驗の心理學を説き、内容と對象とを峻別して内容を以つて對象を表現する象徴關係とを思想などが、特に博士の興味を牽いたのであらう。博士は凡そ大正九年頃を境として、その研究の興味は先驗論理主義より純粹意識學に遷りゆかれた様である。

この後期の思想期に於てなつたものは最後の二篇、『問題の學としてのガイザーの形相學に就て』と『最究竟者』とである。前者に於てはガイザーに於ける *eidos* と *Materie* の意義を明かにし、意

識及びその客觀の種々なる普遍的形相を明かに區別し、次に一々の形相の本質を精密に規定し、而して終に凡て此等の形相相互の合法的關係及び各形相に合法的に屬する質料を明にすることによつて凡ての認識對象の構造を明かにしうることを叙説されてあるとしてガイザーの所説に於て單なる認識論以上に尙その根源に進んであらゆる立場、問題そのものの基礎を考究せんとする要求の眞理は認めつゝも、しかし彼の學説を種々なる點よりその矛盾と不充分が指摘されてある。『最究竟者』に於ては哲學の求むる最究竟者は最も直接自明なる意識であるが、しかしそれは經驗主義のいふ感覺知覚でもなく、理性論のいふ如く純粹思维の豫想する論理でもなく、それよりもより以前のものでなければならぬとし、かくして時空的規定を離れ、論理的構成を去つて求めらるゝものは先驗的な意識であり、*Bewusstsein* である。こは作用をはなれた *Sein* としての意味であり本質であるが、しかしそれは同時に意味統一であり、イデアを産む *Ideation* として無限の生々であり、しかしてこの究竟の絶對自我が自らを知る所に直觀的となり意識的となり、その生産の作用が即ち所産となることを、哲學會に於ける講演そのまゝの極めて平明なる語を以て叙されてある。

かく博士は主としてスペンサーやニイチエ等の喧傳せられた明治思想界の混沌時代を受けて、靜かにアウエナリウス、マツハ等を研究し、他面又シュエームズやベルグソンの思想に激情的な影響を受けつゝ、オイケンを頗み、リッパスを通り、終に先驗的理想主義の立場を把持さるゝに至つた様である。本書の『經驗的より

先驗的へ」や中島博士の記念論文集に於けるウケンアルバンドの解説等がこの確立期に於ける代表的なものであらう。それより博士はナトルプ、リップスの意識學よりフツサルの研究に入り、終に先驗的論理主義より出て、純粹意識學よりオントロジーに向はんとせられつゝあつた。『ガイザーの形相學に就て』に於て博士はいふ、『論理主義と心理主義との戦は激しく戦はれた。さうして勝利はやがて前者の手に歸した。若くは歸せねばならぬ筈である。然るに論理主義が齟つて戦跡を顧み、又た自己を顧みた時に、其處に何となく意に満たない或物があるやうに、一大缺陷があるやうに感ぜられる。或る一種の勝利者の悲哀の感さでも言ふやうなものがある。然らばその一大缺陷とは何であらうか。蓋し論理主義は論理主義といふ一の立脚地を先決して進むものであつて、其立脚地を成立たしめる所以のものに溯ることをしない。もつと奥底に、否な、立脚地の *Postulate* に形而上學的のものがあることを顧みなかつた。彼の實證主義や心理主義の起つたのは形而上學に對する反抗であつたが、論理主義も亦た其軌を一にして形而上學を顧みないのであつて、却つて其を以て特色として誇つて居つたウケンアルバンドは、哲學は物の形而上學で無く、知識の形而上學であるべきであると言つたが、其はやはり知識の「形而上學」ではなくして、「知識」の形而上學であつて、所謂、認識論の範圍に止まつたのである。リッケルトは認識論の一つの途を説いたが、最も原本的のものは概念以前のものととして棄却す。マイルアブルト學派は Sein を説いたが、併かしその Sein は das Sein des De-

ings であつて、論理主義のものであつた。『カントの「批判」は將來の形而上學に對する序説であつて、それ自らは根本的なる獨立なるものである。然るにそれを成立たせる所以のものは何であるか』かくして『あらゆる立脚地、あらゆる理論、あらゆる解釋、に先立ちて、現象の本質を分析する現象學がなければならぬ。』これは博士の晩年の轉向を著しく示してゐる。博士がニコライ・ハルトマンの *Ontologie* を研究し、ガイザーの *Methodologie* に興味をもち、クローナーのカント解釋を解説し、フツサルのイデーンを講義されたのは此の頃である。かの未完のまゝに終つた『哲學講座』を執筆されたのは大體に於てこの立場よりであつた。げに單なる批評主義に止らず、進んで意識の本質に就て深遠なる洞察を得るものこそ眞に理想主義に對して究極の根柢を築くものであつた。しかして以上の如き博士自らの變遷と發展は又同時に大體に於て我が哲學的思想界の推移を指示するものであつて、博士は明治の後年以後常に哲學思想界の先導者の地位にあられた。

本書はかく博士の哲學的貢獻を種々なる方面に互つて傳へうるものであり、こゝに盛られたる種々なる哲學思想の豊富なる内容は後學にさつて資益する所多大なるものあり、且又我哲學思想界の近き過去の推移を見るに極めて意義多きものである。この諸論文はすべて一たび各種の雜誌に發表されたものであるが、中には教育雜誌に掲載されたもの、校友會雜誌に寄せられたるものもあり、今にして編纂さるゝことなかつたならば恐らく散逸するものが多かつたであらう。吾等はこの書の發刊を欣幸させなければ

ならぬ。しかし乍らこの書は未だ決して得能博士の眞の深さを全たき貌に於て表現されたものではない。この書の序にも言はれた通り『學界の士に示す』としてよりも『後進の人々に幾分なりとも現今の思想傾向を理解せしめるよすががさもなれば』との謙讓に充ちたる親切よりなされたものである。博士の最近の手紙によつても『若し健在ならアンナものは葬り去つたでせうが……今後ばもう少し自己の思ふ通りのものを云現はす機会があるか否が解りませぬので如何にも残念です』とある通り、こは決して博士が以つて満足する會心の論文のみではない。博士が過去多年の苦惱に充ちたる研鑽の後、今や漸く圓熟の境に達せられ、眞個の發展大成は眞に今後のことと勵したであらう。事實、本論文の『ポアンカレの直観と論理』に於ても、『關係に就て』にても、『世界觀の哲學』に關しても、『リップスの意識學』に對するナトルプのそれとの比較研究の如きに於ても、博士の創意的なる見解は極めて意蘊深きものであり乍ら、併し尙指唆の領域に止まり、その充分なる發展と派行は後學の展望するまゝに殘されてゐるものが多い。我が哲學界に就て見ても『表面既に大勢が定まりかけて却つて深く内に將來多事の因を養ふ秋に』不幸病魔の襲ふ所なられたのは、實に博士のため、又我が學界のため惜しむても餘りあることである。後世史家が博士そのものの眞價を單にこの断片的に發表された論文のみを以て品評するならば實に天を怨むの外はないこの書には博士の學の博さは現はれてゐても、その深さをその全き相に示すものではない。そして又博士の表現は餘りに謙讓なる

外貌をかることによつて、その深さを和らげてゐることが多い様である。思ふにこれは一つは博士は銳角的な學の人さといふよりも寧ろ餘りに温厚な人格の君子である爲めに、内に奮す燃ゆるが如き眞理愛はその表現に於て常にこの性格によつて和らげられてゐるためであらう。且つは博士は強く自らの主張を現はさんとはせず、外に示さんよりは深く自らに養はんとせられた。そして僅かに後學に述ぶる所はあつても敢て自ら作らうとはせられなかつたこの書の論文も殆んどすべては他よりの機縁に餘蘊なくされたもののみである。そして博士は生涯の精力を殆んど教ふることに捧げ盡された。病臥の前数年は東大と高師、東洋大學に併せて二十時間の授業を擔當され、四つのノートを新に編まれつゝあつた。この過度の緊張が長きわづらひを招いたことは返すも痛ましい限りである。然し既に病漸く愈り、この頃は散步も許さるゝ様になられたと聞く。吾等は博士が再び本に復られ、過去多年の纏著を眞個の圓熟の境に於てその述作を吾等に垂れられ、後世に示されんことを望んで止まない。

尙最後に附記したく思ふことは、本書通卷、廣くして深き哲學思想を説いて、いづくにも一つとして難澁と煩鎖の個所を止むるなきことである。しかも敢て飾らんとする跡なくして到る所平明の美を現はしてゐる。こは、芥川氏の西鶴に下した語をかれは、俳諧より悟入したる言葉の美しさ』によるのであらう。誠にこの書の文は、博士その人の様に、俳諧より悟入したる枯淡の美に充ちてゐる。(由良哲次)